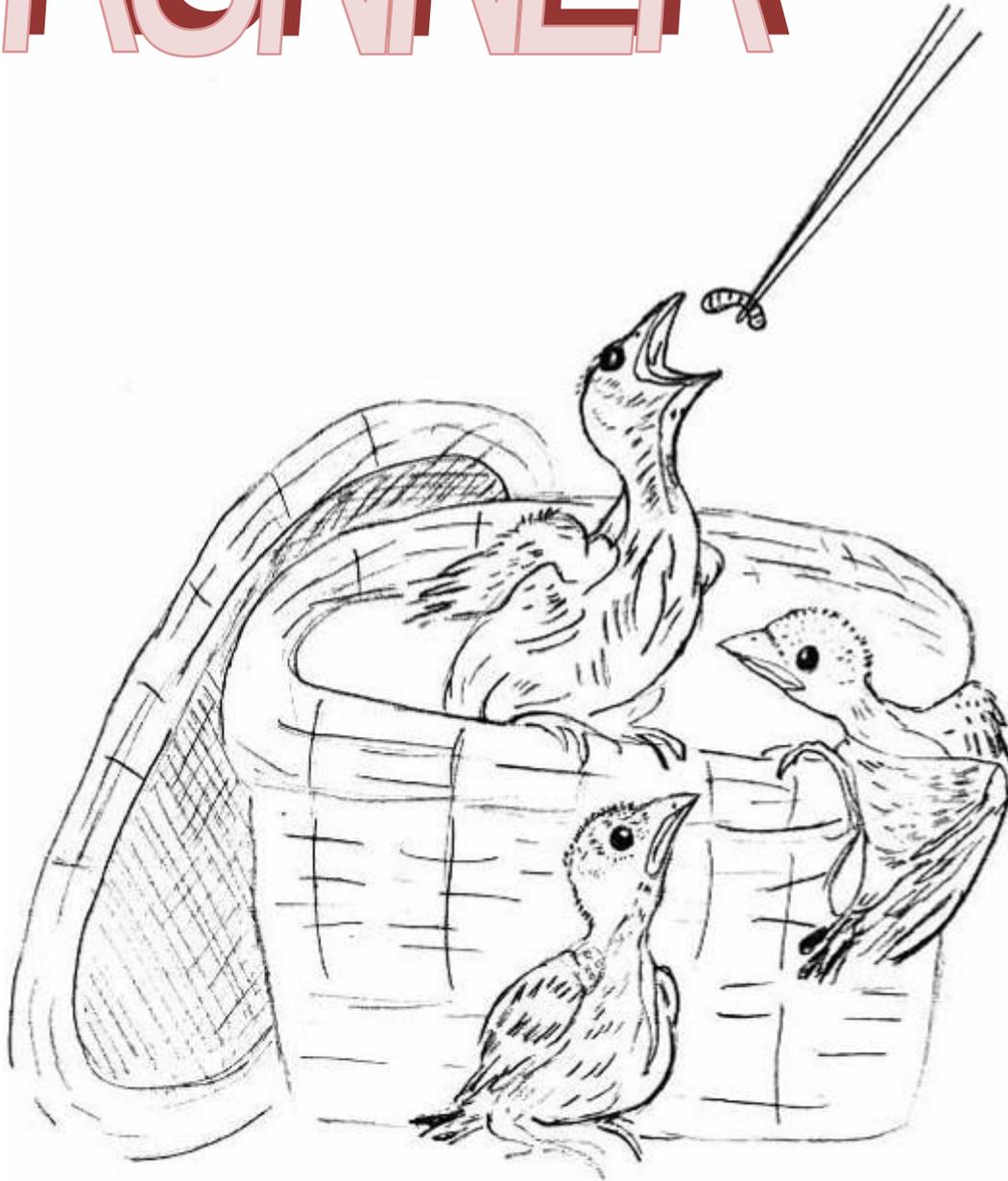


特定非営利活動法人 野生動物救護の会 会報



RUNNER

Vol.7



もくじ

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| ★M プロジェクト.....2 | ★HELLO!! VOLUNTEER☆.....12 |
| ★今日の RUNNER.....4 | ★ボランティア雑感.....14 |
| ★活動の現場から.....6 | ★おたより広場.....15 |
| ★鳥見旅.....9 | ★お世話になりました.....16 |
| ★ランナー通りの住人たち.....10 | ★インフォメーション.....18 |

～ハヤブサ「イソップ」の巻～

M (猛禽) プロジェクト その3

2008年12月、オオタカとハヤブサが相次いで神奈川県自然環境保全センター(以下保全センター)に持ち込まれました。オオタカの保護原因は衝突。学校のガラス窓を突き破ってしまったそうです。その時の衝撃でくちばしにひびが入り先端も欠け、口の中は出血をしていました。餌は自分から食べようとせず、強制給餌をしました。一方、ハヤブサはうずくまっている所を保護されましたが、狩りがうまくいかなかったのか痩せているだけで外傷はありませんでした。冬休みは保全センターの人手が足りなくなるので、手のかかるオオタカを短期里親として12/19から預かり、ついでにハヤブサも一緒に連れて帰りました。

オオタカは預かった3日目には自力で食べるまで復活しました。くちばしのひびは接着剤で補強し飛行にも問題がなかったので1/18に放野決行。みんなが見守る中、保護場所近くから元気に飛んで行きました。

ところが、ついでのつもりで預かったハヤブサが思わぬものを抱えていたのです。

	ハヤブサ
受付番号	090686
保護日	2008年12月12日
保護原因	うずくまっていた
保護体重	989g

へちやむくれ

12/20 881.0g 外の小屋へ。

12/26 875.9g 餌は良く食べるがなんだかシャキつとしない。寒いわけじゃないだろうに足を縮めている。このシャキつとしない感じを人に説明するのに「へちやむくれ」を連発。くちばしと爪を手入れして家の中のケージに移す。

12/29 853.8g 食べているのに体重が減っていくのでウズラを食べさせる。

12/30 815.5g ケージの中に小石が落ちている。小豆から枝豆ぐらいまでの大きさがあり、8個で20g。フンに汚れていないのでペリットⁱⁱとして出したものらしい。不思議!?

2009 1/4 850.1g 空地で両足に細いひもを付けて飛ばしてみるが、まったく飛ばず。追いかけてもトコトコ歩いて逃げるだけ。まるでペンギン。

1/6 906.0g 保全センター獣医師にフンを顕微鏡で見せると鞭虫の卵(野生動物では普通の範囲?)

1/12 867.7g 飛ぶ気を起こすために生きたドバトを使う。飛び立つドバトを見て力強く飛び立ち追いかける。保全センター獣医師と相談の上、放鳥する日を決め、場所の下見に。



イソップ

1/15 820.0g 保全センターの動物のレントゲンを撮るので、ハヤブサも念のため撮ってもらう。レントゲンの結果、驚いた事に胃の中が石でいっぱい。放鳥はしばらく無理と判断。自分から石を食べる行為がどこまで正常なのか判断がつかないが量は多すぎ。ペリットとして出す事が大優先に。ここで「イソップ」と命名ⁱⁱⁱ。

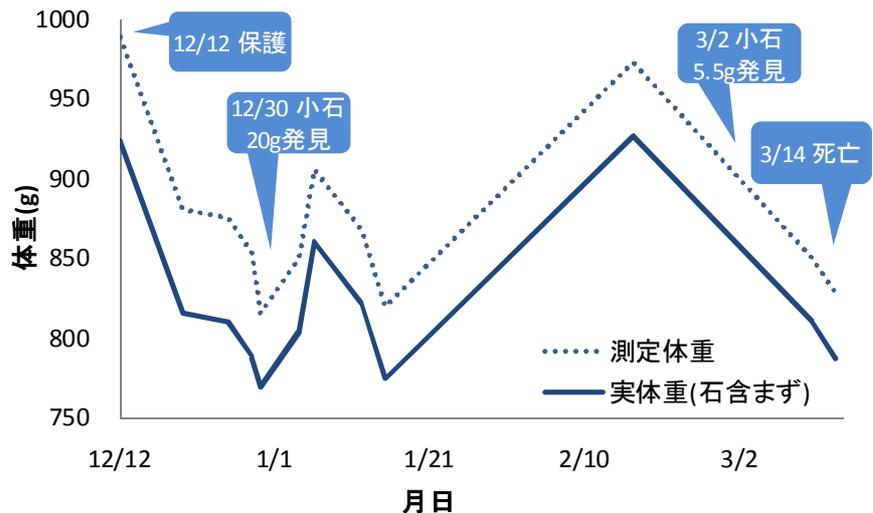
本来なら設備の整っている動物園などに移管して治療を受けさせたいのだが、行政の壁に阻まれ困難。(後日、神奈川県知事さんと話をする機会があったのでこの件を強く訴えたが、ちゃんと届いたかどうか…。)

小屋の床にはマットを敷き詰め、小石を吐き出したらすぐ分かる様にし、ペリットの出しやすい餌(ドバト・ウズラなど)を与え様子を見る事に。

しかし、多量の羽根を食べても小石どころかペリットも出せない様子。外科的処置で取り出す事ができないか、色々検討しているうちに日が過ぎ…。



「イソップ」レントゲン写真



「イソップ」体重変化グラフ

2/16 972.4g 相模原市の水上獣医師に診断を依頼。

獣医師の所見

X線画像からは、^{きのうえん}気嚢炎・左胸部の円形の影（ファンガスボールが疑われる）・^{せんい}腺胃内にまで及ぶ石の陰などが異常所見としてあげられ、血液検査では貧血である事が分かる。

3/2 小石 3つ発見 全部で5.5g

3/11 850.2g 朝、目に力がなく、食欲も極端に減る。たたび水上獣医師の所へ。そのまま入院。

石だけじゃなかった

3/14 828g 死亡。解剖をお願いする。胃の中の小石は全部で 40.2g。今までの小石を全部合わせると 65.7g。実に保護当初体重の 8%に当たる荷物を体内に抱えていたことになる。小石の他に黒いゴム製品らしきものも入っていた。

解剖時の所見

左胸部に腫瘍があり、^{しんのうすい}心嚢水が溜まっていた。病理検査の結果、この腫瘍は甲状腺癌であることがわかった。肺に腫瘍の転移が認められたことなどから、^{あくえきしつ}悪液質になっていたと考えられ、循環器不全が死亡の直接の原因と考えられる。

3/15 死体を引き取り、保全センターへ戻す。

結果として何もできずに終わってしまいましたが、水上先生・福沢先生を始め獣医師の方々、関係者の方など沢山の方に相談させて頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。イソップの事例が今後、何かの役に立つ事を願って。



胃から出た小石

- i 無理やり食べさせる事。
- ii ペリットとは、口から吐き出された不要物のこと。猛禽類は餌の小鳥や小動物等をほぼ丸ごと食べ、羽根や骨などを固まりにして吐き出す。
- iii イソップという名前は童話「オオカミと7匹の子ヤギ」から。留守番中の子ヤギたちをオオカミが騙して食べてしまうが、母ヤギがオオカミのお腹を切って子ヤギを救出し、かわりに石を詰めておく…という話。これは後で気がついたのだが、イソップ童話ではなくグリム童話！気がついた時には既にイソップに定着。



今日のRUNNER



第七走者：サンカノゴイ

ここでは保全センターに運び込まれた傷病鳥獣について保護記録やエピソードを交えてご紹介します。

WHO ARE YOU?



2009年11月28日 顔のアップ

2009年11月、保全センターにとっても珍しい鳥が保護されました。「ホームセンターの前にいたなんだかかわからないサギです」と言われて運び込まれたのは、サンカノゴイ。

日本野鳥の会 鳥類目録Ⅴによると、神奈川県で観察されたのは今までで1985年の一例のみで今回が二例目かもしれないという珍鳥なのです。ましてや神奈川県で保護されたのは初めてのこと。環境省のレッドデータブックでは、絶滅危惧ⅠB類（絶滅の危険性が高い種）に指定されており全国的に見ても数が少ない貴重な鳥です。

救護個体データ

受付番号：090578

種類：サンカノゴイ（成鳥）

保護年月日：2009年11月10日

保護場所：厚木市

状態：削瘦（体重：750g）

外傷：左脇腹に鶏卵大の傷（原因不明）

転帰：2009年12月28日野生復帰

野生復帰までの軌跡

〈第一章 大食漢！？〉

保全センターに来たばかりの動物は、なかなかエサを食べないことがあります。理由は動物によって様々ですが、例えば魚食の野鳥は死んだ魚に興味を示さなくて、しかたなく強制給餌をすることも時々あるのです。

しかし、このサンカノゴイは、保全センターに来た翌日からエサの魚をしっかりと食べ、その量は一回り大きいアオサギよりも多いほどでした。よほど空腹だったのか食欲旺盛で、11月25日には体重が初日より約300gも増えていました。

一方、左脇腹の傷はやや大きかったため、11月14日に縫合手術を行いました。



2009年11月10日 診察中

〈第二章 トラ模様を見せつけて〉

このサンカノゴイは自分でエサを食べてくれるという点に関しては、世話がかからなかったのですが、一つ困った点がありました。警戒心が非常に強いのです。そのため人間がいると常にトラ模様の羽を膨らませて威嚇の姿勢をとります。そしてエサをあげるために人間がケージに手を入れると近づいてきて、つついてくるため、毎日のエサあげに苦労しました。

○図鑑○ NO.7

・サンカノゴイ *Botaurus stellaris*

サギ科 L70cm

北海道北部には夏もいるが、本州以南では冬鳥。

湿地の草原、湖沼などの草原に生息する。単独で生活し、湿地のたけの高いヨシ原にひそむことが多い。夜行性だが、昼間にも活動することがある。

直線的に飛翔し、短距離を飛んですぐくさむらに隠れることが多い。地上では背中を高くし、頭を低くして静かに歩き、ときには迅速に走ることもある。

アシの茎をつかんで巧みにその上を渡り歩くこともあるが、樹上に止まることはまれである。

敵が近づくと、首を上方に細長くのぼして嘴をまっすぐに空に向け、体も縦長にしてじっと静止する擬態の習性がある。

※参考文献

・清棲幸保『日本鳥類大図鑑Ⅲ』増補改訂版

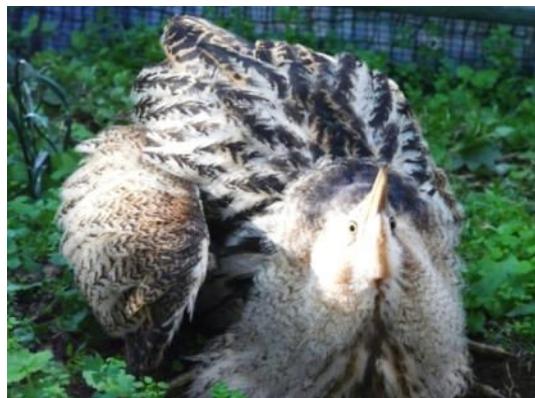
(1978、株式会社 講談社)

・高野伸二『フィールドガイド日本の野鳥』増補版

(2006、財団法人 日本野鳥の会)

11月25日、野外フライングケージ(New house)に移ってからもそれは変わらず、人間に気づいた途端、羽を膨らませ威嚇の姿勢をとり、ちっともサギらしくない体勢を常に見せていました。

12月14日にさらに広い野外フライングケージ(鳥カフェ)へ移動してからは、人間からの距離が遠いせいか、体を細くしてヨシに擬態する姿がよく見られました。



2009年11月28日 羽を膨らませ威嚇

〈第三章 クリスマスプレゼントは?〉

野生復帰を間近に控えた12月24日、サンカノ

ゴイは足環のクリスマスプレゼントをもらいました。とても珍しい鳥なので、鳥類標識調査員(バンダー)さんの協力の下、足環を付けることにしたのです。足環があれば再捕獲したときこのサンカノゴイだとすぐわかります。

そして12月28日、鳥類専門家の方とも相談した結果、より広いヨシ原がある場所で放野することになりました。いよいよ野生復帰の時。箱の入り口を開けるとサンカノゴイはすぐには飛ばず少し周囲を気にしてから、遠くの林に向かって勢いよく飛んでいきました。

回復記録(2009年)

11/10 750g 保全センターに保護される

11/14 左脇腹の傷 縫合手術

11/25 1,050g 野外ケージ(New house)へ

12/14 1,020g 広い野外ケージ(鳥カフェ)へ

12/24 足環をつける

12/28 1,150g 野生復帰

活動の現場から



このコーナーでは普及啓発活動やイベントなどに参加したボランティアさんがその体験をもとにレポートしてくれています。

ボーイスカウト講演会(ボーイスカウト横浜115団)

昨年12月13日(日)に戸塚法人会で開催されたボーイスカウトの報告会で、「神奈川県野生動物救護の現状」「野生動物救護の現場」「野生動物とのつきあい方」の3項目について当会のメンバーが講演を行いました。また、※エデュケーションボードとして、ノスリのジロー、コミミズクのハリー、ツツドリのルンバも参加しました。彼らとのふれあいを通して野生動物の救護活動をより身近に感じてもらえたのではないのでしょうか。

※ここでは、保全センターに保護され治療を施されても翼を失ったり神経症状が残ったりして、野生復帰に支障をきたす障害を持ち、「野生動物と人との問題点」などについて身近に感じ、理解を深めてもらうための教育活動などに参加している鳥たちのコト

☆講演後のアンケートから感想を一部抜粋☆



渡辺優子理事長&ノスリのジロー

知らないことが多く、動物のためにいろいろな取り組みが行われていることに驚いた。

TVでは放送されない具体的な活動を知れて大変おもしろかった。

年末大掃除&トン汁大会

昨年12月19日(土)に毎年恒例の傷病舎大掃除が行われ、お昼にはトン汁やけんちん汁がふるまわれました(^ω^)差し入れもいろいろいただきました♪20人くらいが参加して、A室やB室のペンキ塗りや大量の落ち葉の片付けやボランティア室のじゅうたん剥がしなどの普段はなかなか手が回らない作業も出来ました。



また、やっちゃったか...

あ〜あ〜
はみだしちゃったよ。

A室ペンキ塗りの様子



トン汁&けんちん汁料理中

水鳥探鳥会 in 酒匂川 etc.

冬にはカモがたくさん渡ってきますね。ってコトで2月13日(土)に水鳥探鳥会が行われました♪ 今回のコースは・・・小田原駅前(バス)→ビジネス高校前バス停→酒匂川河口→運動公園→飯泉取水堰→扇町しらさぎ公園(昼食・トイレ)→狩川流域→飯田岡駅(大雄山線)→小田原駅 でした。近頃バードウォッチングに目覚め、この探鳥会に参加した当会ボランティアの渡辺みずほさんから感想が届いているのでご紹介します。

朝から小雨が降り、「今日はあるのかな？」と心配しながら集合場所の小田原に向かいました。今回は少人数5名での探鳥会です。

目的地の酒匂川に到着すると、遠くにカモ類の姿が！探鳥会に初心者の私は、はしゃいで大声を出してしまい「小さな声でね」と早速心得を教えてくださいました(笑)

ヨシガモやカルガモなどがいたのですが、双眼鏡でのぞくとあまりはっきり見えず、こんなものなのかなあ？とっていました。他の方に聞いてみると、なんとレンズ調整の仕方をおらずそこから教えていただきました。やっと準備万端(?)・視界クリアになりかわいい姿を堪能できました。

川沿いを歩きながら鳥の見分け方などを聞いていると、横ではダイサギが優雅に飛んでいたたりカワウが群れをなしてたたずんでいる姿が見れました。川からは湯気がたちのぼり鳥たちが温泉に入っているようでした。(私も入りたい気分でした。)

その後もセグロカモメやキセキレイ、オホジロ、ツグミなどを見ることができました。最後の最後に、カワアイサを見ることもでき本当に寒い日でしたが、楽しい探鳥会となりました。次回参加の時は、色々と教えていただいたことを忘れず、楽しもうと思います！



☆今回見れた鳥たち(なんと34種!!)☆

カルガモ、コガモ、ハシビロガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモ、キンクロハジロ、カワウ、カイツブリ、オオバン、カワアイサ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、キセキレイ、トビ、ミサゴ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、モズ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キジバト、ハシボソガラス、イソヒヨドリ



企画展示in自然環境保全センター

現在、自然環境保全センター2階ギャラリーにてパネル展示をしています。「人のくらしのかげで傷つく野生動物たち」と題し、野生動物たちの人工物への衝突や誤認保護、猫による被害など、私たちのすぐそばで私たちのせいで傷ついている野生動物たちの現状についてボランティア作のパネルでご紹介しています。私たち野生動物救護ボランティアが実際に見てきたコトを、少しでも多くの人に知っていただけたら嬉しく思います。



展示風景

展示期間：～5月9日（日）予定
開館時間：午前9時～午後4時30分
場所：自然環境保全センター本館
2階ギャラリー
休館日：月曜日（祝日の場合は開館）
祝日の翌日

ボランティア研修会

3月6日（土）保全センターにてボランティア研修会が行われました。今回の講師はニホンザルの研究で有名な伊沢紘生先生（宮城のサル調査会）です。「世界の中のニホンザル」と題して、ニホンザルの話にとどまらず幅広い話をしてくださいました。伊沢先生は、長年の研究の結果に基づき、ニホンザルのなかにボスザルにあたるサルは存在しないと提唱しています。このことに関して、様々な論争があるようですが、“いることの証明”よりも“いないことの証明”のほうが難しいということを経験を通して改めて感じました。



石川県白山国立公園で

ニホンザルの生態調査をする伊沢紘生先生



保全センターで行われた講演会の様子

（今回は野生動物救護ボランティア以外の
方々もたくさんいらっしゃいました！）

鳥見旅

昼間は野外に出てバードウォッチング、夜にはムササビを観察。当会ボランティアの方の中には、仲間同士で野外へ観察に出掛ける人もしばしば。このコーナーでは、そんなスタッフのフィールド巡りの旅をご紹介します。

【渡良瀬遊水地】

2010年3月15日(日)、当会のボランティアの方のお誘いで栃木県の渡良瀬遊水地にバードウォッチングに出かけました。

渡良瀬遊水地は栃木県、群馬県、埼玉県、茨城県の4県の県境にまたがる日本最大の遊水地。広大なヨシ原が広がり、また遊水地の中には谷中湖という大きな貯水池もあります。そしてそのヨシ原を棲みかとするタカもいるとか…。果たしてどんな野鳥に会えるのでしょうか？

無事に渡良瀬遊水地に到着し、早速バードウォッチング開始!! ヨシ原を眺められる観察台から双眼鏡、望遠鏡を使って辺りを探索しました。すると、いきなり茶色くて腰が白いタカを発見!! そのタカとは、ハイイロチュウヒのメスでした。

ハイイロチュウヒはヨシ原を棲みかとする中型の猛禽類で、ヨシ原に生息するネズミや小鳥をエサとしています。そのためか、ヨシ原の上を掠めるように低空飛行する姿が見られました。場所を移して観察を続けていると、体は灰色で



ハイイロチュウヒ(メス)

羽先が黒いタカを発見。それはハイイロチュウヒのオス。メスは茶色で地味な色なのに対してオスは白っぽい灰色をしているのです。その姿にメンバー一同大興奮。カメラを構えるもあっという間に遠くへ飛んで行ってしまいました。

貯水池である谷中湖では水上にヨシガモやヒドリガモが、上空にはミサゴが旋回していました。また、タゲリやセイタカシギなど水辺の野鳥も多く見られました。

その後もヨシ原に場所を移して観察を続け、チュウヒやオオタカなどの猛禽類やキジやオオジュリンといった藪に棲む野鳥を観察し、そのまま日が落ちるまで観察を続けました。

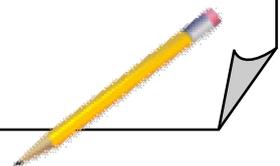
渡良瀬遊水地で合計 47 種類の野鳥を観察することができました。

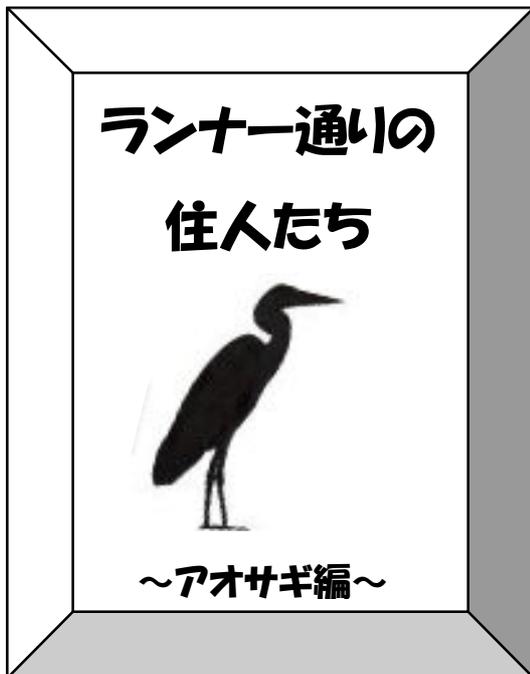
皆さんも是非、友達や家族で地元とは違う場所へ観察に出かけてみてはいかがでしょうか？

【観察できた野鳥】

ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ノスリ、チョウゲンボウ、トビ、ミサゴ、オオタカ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、スズメ、シジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ツグミ、モズ、ヒバリ、ウグイス、ホオジロ、アオジ、ジョウビタキ、オオジュリン、アカゲラ、シメ、キジバト、ドバト、セグロセキレイ、キジ、ベニマシコ(声のみ)、ダイサギ、アオサギ、コサギ、カワウ、カルガモ、カイツブリ、バン、オオバン、セグロカモメ、カモメ、ヨシガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、マガモ、コガモ、タゲリ、セイタカシギ

計 47 種





蒼鷺、Grey Heron、*Ardea cinerea*
コウノトリ目サギ科アオサギ属

アオサギってどんなヤツ?

アオサギといえば、川や海にいてでっかくて長く、どちらかというと青というよりも灰色っぽいサギです。だから英語で`Grey` Heron なんですね～。

とは言ってもアオサギは意外とカラフルで、頭と肩は紺、嘴と足はピンク、胸は白黒の縞模様なんです。

繁殖期には嘴が黄色～ピンク～紫のようなグラデーションになり、顔の色もはっきりして飾り羽がついてとてもキレイです。

繁殖期にはコロニーで4～5月に3～5個の卵を産み、ヒナは23～28日で孵化、孵化後50～55日で巣立ちます。

また、日本では本州と四国では留鳥、北海道では夏鳥、九州では冬鳥です。世界的にはユーラシア大陸からアフリカ大陸にかけて幅広く生息しています。

鳴き声は以前このコーナーで紹介したササゴイとは違い、「ガァーッ」というか「ギャァー」というか、太くちょっとしわがれた声を発します。

ガツガツしてます

アオサギは体が大きいこともあり（体重は1kg

を超えます＝日常よく目にするトビ以上！）、食欲もとっても旺盛です。自然界では魚やカニ、カエル、トカゲ、昆虫なんかを食べますが、保全センターでは魚をあげています。（たまにボランティアさんが取ってきたザリガニなんかを上げると喜びます。）

そんなアオサギは、エサをあげるのが大変なんです。

というのも、まだ人がエサの入ったトレーを地面に置いていない時からすでに中の魚を狙っているため、嘴がものすごく近くにビョッと伸びてくることがあるんです。私もビックリして思わずトレーを落としてしまったことがあります、そんなの構わず落ちた魚たちをガツガツ食べています。

一歩間違えれば自分の手に穴があくのではないかと、毎回ヒヤヒヤしながらのエサやりです。



ただ、さすがのアオサギも真夏には食欲が減退するらしく、あまりがっついてこないで、エサやりも楽になります。

←080365

ケンカっばやいやツラ

受付 No : 050483

受付日 : 2005年9月9日

保護場所 : 相模湖町

畑でケガをしてバタバタ暴れていたところを保護された。

☆受付 No : 080473

受付日 : 2008年7月22日

保護場所 : 南足柄市

民家の庭で飛べずにうずくまっていたところを保護された。

この2羽は以前紹介したカワウと一緒にフライングケージ（露天2）で同居していました。

他のサギ科の鳥でもそうですが、特にアオサギは

もともと攻撃的な性格のようで、人の目を狙ってくる場合があります。そのため、保定などのときには気をつけなければいけません。(しかも思ったよりも首が伸びるので要注意です!!)

そんなアオサギは1人の時間を大切にするヤツというか、他人に干渉されるのがあまりお好みではないらしく、ちょっとでも他のヤツが自分のテリトリーに入るとかなりギャーギャー怒ります。



アオサギ同士もケンカしますが、チョコチョコと2羽のアオサギの間を行ったり来たりしているカワウにもケンカをしかけて、体の小さいカワウは負けてしまうことが多かったです。

しかし、080473が別のフライングケージ(New House)に移動し、050483はカワウと2人きりになりました。その途端、今までえぱりちらしていた483がカワウに撃退されるようになっちゃいました。もしかしたら今の状況だと、一緒にエサをあげたらカワウに全部食べられてしまうのかもしれない。

ピラミッドの頂点は…?

みなさんも理科の教科書などで、生態系のピラミッドって見たことありますよね?

その頂点は誰だと思えますか?

まあ普通は、哺乳類ならライオンなどの猛獣、鳥

なら猛禽類ですよ〜。

ですが、保全センターでのピラミッドの頂点はちょっと違うかもしれないのです。

☆受付 No : 080365

受付日 : 2008年6月21日

保護場所 : 伊勢原市

カラスに追われて建物にぶつかった。

左中手骨開放骨折。

☆受付 No:080614

受付日 : 2008年10月6日

受付場所 : 小田原市

1週間くらい前から保護場所であるハス畑にいた。右前腕の筋肉が腫脹していた。



オオタカと一緒にいる 080614

この2羽はフライングケージ(露天3)でオオタカと一緒に同居しているのですが、このオオタカとの関係が不思議なのです。

保全センターではアオサギには普通魚をエサとしてあげています。と、そこまではまあ一般的かなと思いますが、この2羽だけは与える際の注意点があります。

それは、オオタカよりも先にエサを与えること。

なぜかと言うと、間違えてオオタカに先にエサ(鶏頭)を与えると、お腹を空かせたアオサギたちは鶏頭を丸飲みにしてしまうからです!!

なんで魚食いのアオサギが鶏頭を美味しそうに食べるんだという感じですが、こいつらはきっと病みつきになってしまったんでしょうね。

野生下では絶対見れない不思議なアオサギさんたちの行動です。

HELLO!! VOLUNTEER☆

-このコーナーでは、ボランティアさんの紹介をしていきます-

アオバズクの母

～長期ボランティアの杉山さん～

第一期生としてボランティア登録をして以来、8羽ものアオバズクを預かってきたアオバズクの母、杉山さんの紹介をします。

杉山さんは、なかなか保全センターまで足を運べないため、長期ボランティアとして登録しました。普段、見慣れない鳥を預かってみたいと思い、アオバズクを預かろうと決めました。最初に預かったのがアオちゃんです。しかし、アオちゃんは一年弱で亡くなりました。動物病院で調べましたが、原因は分かりませんでした。アオちゃんは剥製となって、今でも杉山さんのお宅にいます。

それから続けて、ムサシ（長期）、チビちゃん（長期）・・・などと育ててきました。現在は、ノンちゃん（短期）・トモちゃん（長期）・チーちゃん（長期）の3羽のアオバズクと、1羽のチョウゲンボウ（長期）を預かっています。

ご自宅には、たくさんのフクロウグッズが並んでいるところからも、すっかりアオバズクにはまっている様子がうかがえます。



今、預かっているアオバズク3羽

10年間も生きたチビちゃん



ナナちゃんの上に乗るチビちゃん

預かったアオバズクのなかで、最も長生きしたのが、チビちゃんです。ヒナの頃に保護され、その後、約10年間も杉山さんに育てられました。自分でエサを食べられないチビちゃんに、杉山さんは、10年間毎日差し餌をしました。そして、昨年、卵秘（卵詰まり）が原因でチビちゃんは亡くなりました。杉山さんにとってもよく懐いていたようで、肩に乗せることもできました。また、家にいたゴールデンレトリバーのナナちゃんとも仲良しでした。ちなみにナナちゃんも、今いるミニチュアダックスフントのさくらちゃんも、里親としてひき取ったワンコです。優しい杉山さんのもとに自然と動物が集まってくるのですね。↓写真（チビちゃんの卵）



飼育の工夫

～母の手で安らぐアオバズク～

持ち上げられた時は、少し暴れますが、すぐにウトウトとして寝てしまいそうなアオバズク。その秘訣は・・・？



アオバズクは嘴の上（目と目の間）と耳の部分なでると気持ちいいようです。アオバズクの母ならではの技ですね！！

～健康管理～

経験から3～4月が体調を一番崩しやすいようです。その時期には、毎日の餌（コオロギ・鶏肉・鶏頭・冷凍マウス）に加えて、サメ軟骨顆粒（栄養剤）やカルシウム剤を毎日与えています。もちろん、保温もしっかりと行います。家族の協力も必要とのことでした。

週に一度は、自分で健康チェックを行い、定期的に動物病院で嘴や爪を切りに通っています。

～ストレスを減らす～

「野生の生き物だから。」と、ストレスを減らすことを非常に意識しているようです。

毎晩、数時間ケージから出して、暗い部屋を自由に動けるようにしたり、暖かい日は日光浴をさせたりすることでストレスを減らそうと意識しています。

ボランティアを通して

ベテランボランティアの杉山さんは、ボランティアを通して、自然や動物について色々考えるようになったと言います。

「環境が整わないと夏鳥のアオバズクは渡ってこられないので、自然環境を意識するようになった。みんなが共存できる自然を未来の子供達に残してあげたい。」と語る杉山さん。また、最近では盲導犬センターに見学に行き、募金ボランティアとしても協力している。「塵も積もれば山となる、というけれど、その塵になれば一人じゃなく皆が協力しないといけない。」と、ボランティア精神あふれるアオバズクの母、杉山さんでした！





ボランティア雑感

このコーナーではボランティア歴1年目の平さんが日々の活動を通して感じたことを紹介します。

～ムササビとの暮らし その後～

11 月半ば、そろそろ夜行性に目覚めても良い頃だと思うのだが、一緒の部屋で寝ると、布団の中にもぐり込んで来る。明け方置いてあるみかん、りんご等を食べに起き、食事が終わると又寝る。朝は部屋に閉じ込めておくのだが、出せ出せとばかりにドアに体当たりしてくる。しばらく居間に放し遊ばせる。

11 月末、木の葉を与える。興味を示しチョット齧る。以後犬の散歩のおりには、花切バサミを持参し椎、楠、樫の木等、切っては持ち帰り与えてみた。

12 月になり、体重は800gとなった。居間の片隅に小枝を落とした木を横に渡し、そこでオシッコとウンチの練習をさせる。はじめは下から刺激を与えないと出来なかったが、3日もすると一人でやるようになった。

12 月 15 日、七沢に連れて行き、FC(フライングケージ)にいる他の3匹と一緒にする。寒さが本格的になる前に、少しでも外の環境に慣れるようにと願ってのことだった。

12 月 24 日、ボランティアに行くとき、1匹だけツバメ室に置かれている。体重が減り、一部毛も抜け落ちている。又しばらく家で育てることにする。帰宅後いつもの場所に放して出ようとすると、肩に飛び乗りムグムグと耳元で鳴き、頬をペタペタと舐める。何度放してもすぐ同じ動作となるので落ち着くまでしばらく一緒にいることにした。まるで、犬を獣医さんに預けて引き取りに行ったときとそっくりであった。

明けて正月、ムササビの飼育箱を作り、そこで生活させることにした。このころには夜行性となり、朝には置き餌も大分無く

なっていた。体重も戻ったのでミルクを切るべき、毎日少しずつ量を減らしていくこととする。

最初は朝夕二回与えていたのを、朝一回だけとして体重の増減を見ることとした。与えた一握りのひまわりの種は、毎夜完食している。



1 月 23 日、ミルクを完全に止める。体重972g、体毛も一部大人の毛に変わり始めた。

1 月 31 日、再び七沢で他のムササビとの生活を始めることとした。次の日は夕方から雪となった。心配したが皆で体を寄せ合い寒さをしのいだようである。仲間はずれにされることもなく、生活しているようでホッとす。ボランティアの時には、枝切ハサミを持ち敷地内の木々の枝を切り落とし、ムササビ小屋に挿している。

もうしばらくすると桜も咲き出し、林の中にも木の芽が芽吹く頃となる。その頃に別れが来るのだろうと、嬉しいような淋しいような気持ちである。

おたより広場



- 編集部に届いたおたよりを紹介します -

★探鳥会を開いて欲しい!



まだ鳥についてよく分からないので、これから覚えていきたいです。しかし、一人でバードウォッチングをしてもなかなか野鳥を見つけることができません。救護の会で探鳥会が企画されていましたが、天気が悪いことが多く、参加できていません。もう少し探鳥会が増えると嬉しいです。

(森さん)

★印象に残っている活動

ボランティアで印象に残っていることは、昨年の春に二回ほど環境教育に参加させて貰ったことです。実際に自分達で内容を考え、手応えを感じることが出来たことはとても良い経験になりました。今後も続けていきたいです。(Mさん)



私の一枚!



「ご応募待ってま〜す!」

次号のテーマは、「食事(もちろん動物の)」です。あなたのお気に入りの写真を送って下さい。保全センターで撮った写真はもちろん、ご自宅で預かっている動物の写真も大歓迎。写真と一緒にタイトル、コメントもお願いします。

★「ボランティア雑記」

今日は、午前中に行う作業が早く終了した。十一月にしては暖かい日だったが、ツバメのヒナ達をお湯で洗ってやることになった。

ツバメのヒナ達は、床の上を歩くことが多く、足や尾羽に自分のフンをくっつけてしまうことがあるからだ。ぬるま湯でフンの塊を落としてからタオルでふく。あとは、自然乾燥。

どんな生き物にもいえることだが、元気でいてくれることが一番うれしい。もっとも、世話をてこずらせることに腹が立つこともあるが、それが一番の元気な証だ、と思うと少し笑顔が戻る。

(鈴木美央さん)



皆様からのおたより大募集

文章の内容は[ボランティアに関すること]なら自由です。形式は、俳句・ポエムから長文(250字程度まで)まで自由です。また、「私の一枚」のコーナーではテーマにそった写真を募集しています。表紙の絵を描いて下さる方も大・大・大募集です!原稿・写真は、救護の会宛(住所はインフォメーション参照)に郵送していただくか、直接保全センターまでお持ちください。名前とご連絡先と名前を載せてもいいかを明記してください。よろしくお願ひ致します。



お世話になりました

自然環境保全センターの野生生物課で勤務されていた獣医師の福富先生が2010年3月末でセンターを辞められます。4月からは新しく神奈川県内の動物病院に勤務されます。

福富先生はとても一生懸命に野生動物の救護に取り組んでいました。傷病鳥獣のためにどのような治療をすれば良いか、どの薬が良く効くのかなど試行錯誤している姿も印象的で、日々動物たちの健康のために最善を尽くされていました。傷ついた動物たちが一匹でも多く野生復帰できたのは、福富先生の傷病鳥獣への温かい気持ちと努力があってこそだと思います。

またお忙しい中、私たちボランティアの面倒も見て下さいました。作業面だけでなく、ボランティア日誌にコメントをぎっしり書いて下さっていたのはご存じでしょうか？

そんな思いやりのある福富先生と保全センターでお会いできなくなるのはとても残念です。3年間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。先生、また遊びに来て下さいね！

最後に、福富先生からメッセージを頂きました。



◆獣医師：福富 潤 先生

◆好きな動物：チーター

◆苦労した動物：ニホンザル
尿をかけられたり、檻を移し替えるのが大変だった。強暴なサルには麻酔をかけなければならなかった。

福富先生とコアホウドリ

早いもので神奈川県自然環境保全センターに勤めて3年になります。その間、野生動物救護という業務を行ってきたわけですが、元々野生動物に携わる仕事に就くことはまったく想定しておらず、学生時代に野生動物学という講義がありました。履修するも単位未修得、その時に買った教科書も今は手元ありません（今にして思えば勿体無い事をしました）。センターで働き始めた時はヒヨドリとムクドリの見分けさえつきませんでした。今でも野生動物に対する興味や関心は、私よりもこの冊子を読んでいる人たちのほうが強いかもしれませんね（でも決して野生動物が嫌いなわけではないですよ）。

そんな感じで始まった仕事なので難しい部分もありましたが、自分なりに課題や問題意識を持ちつつ仕事に取り組んできたと思っています。今回は私がどんな事を思い、考えながら3年間を過ごしてきたのかをお話したいと思います。少しだけ皆さんにもお付き合い頂ければ幸いです。

突然ですが、野生動物救護の意義とは何でしょうか？傷ついた野生動物の命を守る、希少種の保護、野

生動物の生態の解明、生態系の保全、生物多様性の維持、環境モニタリング、環境教育や普及啓発、etc. と色々な役割が言われています。野生動物の分野に長く深く関わってきた人たちの中には、この意義とは何かの議論は既にされ尽くして、今さらそんな話をしても何も変わらない、という人もいるでしょう。しかし、それらの意義を実践し、成果を上げることは簡単ではありません。そこには様々な課題や問題があります。今日は私が仕事を通じて感じた野生動物救護の課題や問題点について話をしたいと思います。紙面の関係上、全般についての話は無理なので、獣医師として取り組んだ傷病鳥獣に対する獣医療に関する事を中心に進めていきたいと思っています。

持ち込まれた傷病鳥獣に対して診断をつけて治療をするということは獣医師ならば当然の事でしょう。では、それにどのような意味があるのでしょうか？自然環境全体の中で考えると、相手が希少種や絶滅危惧種ならそれだけで大きな意味があるかもしれませんが、しかし、生息数の多い動物相手の場合はそれだけではあまり大きな意味は無いかもしれません。しかし、診断、治療というのは、野生動物救護の最も基礎になる部分であると思います。それを通じて重要な発見や自然環境の変化などに気づく事もあるのではないかと考えています。

私の職場では、年間で約 600 の傷病鳥獣が搬送されてきます。そしてその内約半数は短期間で死んでしまいます。野生動物である以上、自然淘汰ということもあるでしょうし、その様な動物に対しても救護が必要なのかは意見が分かれるところでしょう。中には救護するべきではない傷病鳥獣もいるように感じていますし、救護するべき固体であっても予後不良という判断をすることもあります。ただ、基本的には人の活動の影響により本来の自然環境下では起こりえないトラブルによって傷ついた野生動物に対しては、できる限りの処置を行いたいと考えています。しかし、治療をする上で困ったこともありました。

私が治療方法を選択する際に重視している事に Evidence Based Medicine (EBM、日本語では根拠に基づいた医療と訳されています) という考え方があります。治療法を選ぶ際に、期待できる治療効果、起こりえる副作用のリスク、予後に与える影響などは重要な要素です。EBM とは、それらを検討する時に、過去の臨床結果や報告を参考にしながら、疫学的手法や統計学的な比較を用い、なるべく客観的な根拠に基づき、最良の治療法を選択しようという考えです。元は人医療における考えでしたが、今では獣医療においても重要視されてきていると思います。しかし、野生動物の分野にこの考えを応用しようとしても、参考とするべきエビデンスが皆無といっても良い状態でした。その為、ペット等飼育動物や人間の医療に関する報告などにエビデンスを求めながら治療を行い、いずれ動物種や症例ごとの治療結果をまとめられればと思っていました。治療結果をまとめ、今後の参考にすることが出来れば、持ち込まれた動物の死亡率を下げ、野生復帰の確率を高めることが出来るでしょう。今では、全てではありませんが、動物が持ち込まれた段階でどんな処置をすればどの程度の効果が得られるかが何となくわかるようになってきました。しかし、私の力不足もあり、残念ながらそれらを総括するにはいたっていません。野生動物の治療を行うにあたり、より良い治療法を選択するためには、現場からの症例報告やそれらの客観的な比較検討ということはまだ足りていないように感じます。これからの野生動物救護を考える上での課題の一つではないかと思っています。今後、私としても微力ながら何か貢献できればと考えています。

今回は野生動物の獣医療についての話でしたが、野生動物の分野は他にもまだよく分からない事が多いです。今回の話がこの冊子を読んでもくれた人たちの今後の活動のちょっとしたヒントになってくれれば私としてもうれしいです。

インフォメーション

イベント

ボランティア講習会

●ボランティアとして活動するための第一歩です。講習会にて野生動物救護に必要な知識・技術を学びます。

▽日時 5月15日(土)16日(日)

▽場所 自然環境保全センター

東京バードフェスティバル

●“いきものいろいろ楽しもう！生物多様性保全を目指して”をテーマに様々なイベントが盛りだくさんです。

▽日時 5月29日(土)30日(日)

10時～16時

▽場所 東京都立東京港野鳥公園

パネル展示

●企画展「人のくらしのかけで傷つく野生動物たち」

▽日時 2月2日(火)～5月9日(日)

午前9時～午後4時30分

▽場所 自然環境保全センター本館2階展示ギャラリー

※詳細は当会ホームページをご覧ください

☆みなさまからのおたより大募集☆

ボランティアに関する文章・写真・RUNNERの表紙絵など募集中です。皆様からのおたよりお待ちしております。※送って下さった原稿・写真・絵はお返し出来ません。また、全てのお便りを掲載できるとは限りませんのでご了承ください。また、いただいた個人情報は、RUNNER編集以外の目的で使用することはありません。

★★ 会員へのお誘い ★★

当会は、ボランティアスタッフの協力と設営趣旨にご賛同いただきました皆様方の寄付によって運営されております。

私たちの活動を支えてくださる賛助会員も同時に募集しています。

★ボランティア会員(年会費2,000円)

一般会員:どなたでもご参加いただけます

救護会員:ボランティア講習会を受講し、野生動物救護ボランティアとして登録された方

★学生会員:学生の方(年会費1,000円) <区分は上記と同じ>

★賛助会員:当会の活動にご賛同いただき寄付をしていただいた方

年会費:法人一口5,000円 個人一口3,000円 一口以上

振込先 ゆうちょ銀行振り替え口座 : 00270-0-47040

名義 : 特定非営利活動法人 野生動物救護の会

RUNNER とは??

この会報のタイトル“RUNNER”には3つの願いが込められています。

☆救護の会が RUNNER のようにどんな困難も乗り越えて進んでいけるように

☆動物たちが元気に大空に飛び立ち、走り続けていけるように

☆タヌキのらんちゃんが天国で元気に走り回っていますように

発行月: 2010年4月 発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護の会 電話: 0463-75-1830

〒259-1306 神奈川県秦野市戸川1086番地の4 ホームページ: <http://kanagawa-choju.sakura.ne.jp/>

編集者 表紙絵: 馬岡洋子 ランナー通りの住人たち: 高橋恵 今日のRUNNER: 小松美絵

Mプロジェクト: 渡辺優子 鳥見旅: 山下宏幸 活動の現場から: 加藤わか葉

ボランティア雑感: 平美也子 ハローボランティア: 本田由美 お世話になりました: 山下宏幸

みんなからのおたよりコーナー: 本田由美 インフォメーション: 塩崎麻由

Special thanks 加藤千晴先生、杉山さん、平さん、平沼さん、三輪さん、渡辺さん、武田さん ご協力ありがとうございました☆